



Soba Choko Art

Soba Choko Art 第7回 そば猪口アート公募展

総評

公募展として第7回目となる今年、北は北海道から南は沖縄まで日本国内33都道府県をはじめ、中国、韓国、台湾と国際的な応募があり、276点の作品が寄せられた。昨年に比べ、応募点数が66点増加している。単に器としての機能美だけでなく、芸術性を含めて審査をすることが広く国内外に理解されてきたことが応募総数の飛躍的な増加に結びついた。

年齢も20代から80代迄と幅広く、力作が寄せられた。20代から30代の若手の作品が多く、これは昨年からの引き続きの傾向である。本公募が若いクリエイターに認知されてきたことは嬉しい限りである。

入選は巡回展を含め、126点と決められていたために昨年より格段に厳しい審査となった。鑑査を行う途中では私語はなく、淡々と審査員5人が自分の美意識のもと票を入れていった。結果として45%の入選率であるために半数以上が展示をされないことになるのは、誠に申し訳ないことであ

る。展示できない作品は劣っていたのではなく、バランスやデザイン性、完成度などの何かが少し足りなかったのだが、他の展覧会では十分に高い評価を得るものと思う。

審査員賞を含む12点の受賞作品は、最初から審査員の目を引き高く評価されてきた30点以上の中からさらに絞り込むのであり、ここには十分な時間を費やした。どの作品も造形力、素材美、表現力が高く、「Soba Choko Art」展として圧倒的な存在である。

今年もこの展覧会を目指し、応募していただいた皆様に深く感謝し、優れた作品に出会えたことを嬉しく思っている。愛知県、東京都、山形県と巡回をする本展覧会を通して、手のひらの中の芸術が世界の共通の美意識を生み出すことを期待している。（三田村有純）

大賞

8.7×8.7×6.5 cm



Reborn

佐野圭亮 1994年 / 群馬県

〈漆・麻布・銀・金 / 乾漆〉

漆がもつ「黒」の新しい見え方を追求し、平文技法と対比させ質実剛健に仕上げました。

【選評】漆の美は漆黒という言葉に代表される黒漆の輝きにあるが、その呂色面とマットなつや消しの部分との対比が凹凸を与えることでより魅力的に映る。そこに金と銀の平文技法で要所を占めているデザイン感覚は実に優れている。完成度の高い美しい器である。（評：三田村有純）

準大賞

9.3×9.3×7.0 cm



漂霧 -朝- -夜- 白井 渚 1991 年 / 愛知県

〈磁 / 錆込み〉

朝霧、夜霧。冷たい空氣に立ちこめる霧をイメージしました。

〔選 評〕 錆込みによって成形されたカップ型に、まさに霧のように大氣中に漂う白と黒の織り成す幻想的な模様を表わしている。錆込みの際、白磁土の泥漿には少量の黒、黒の泥漿には少量の白磁土を混ぜる。そうすると錆込みの最中に自然に少量の黒や白が動き、墨流しのような模様を形成するのである。白と黒の色彩の対比に、さらに口縁に銀彩を施している。この色彩感覚のモダンさ、錆込みの新たな解釈、操作による模様の巧みさは群を抜く。(評:金子賢治)

優秀賞

10.0×10.0×7.0 cm
10.0×9.0×7.0 cm

葉 器 大江 絵 1995 年 / 東京都

〈銅 / 鍍金〉

そばの繊細な香りがさわやかに引き立つよう、青々とした葉を軽やかに器に添えるイメージで作成しました。どちらも金属板一枚から成形する鍍金技法を用いています。

〔選 評〕 見る側の心のありようによって、底知れぬ力が伝わってくる初々しい作品である。一枚銅板を素材に、鍍金技法により形成し、細部に葉脈の景色を写し込み、全体の形を変化させながら銀彩を施し、作者がイメージしたであろう情景が爽やかに伝わってくる秀作である。(評:木下五郎)

優秀賞

8.2×8.2×9.5 cm



雪 溪 保木詩衣吏 1985 年 / 石川県

〈ガラス / ホットワーク・キルンワーク・絵付け〉

山の雪どけの美しさや、水の清らかさをモチーフに制作しました。ぜひいろいろな角度から感じていただけたらと思います。

〔選 評〕 標高の高い山に残った雪、まさに作品名の「雪溪」をガラスの中にはっきり見ることができるとは。暑い夏に涼しさを届けてくれるような作品である。正面から見た景色、器の中の景色、そしてガラスの底からの景色、様々な雪溪の風景を見ることがでる。真夏に冷たいそば汁を入れてざるそばを、このそば猪口でいただきたい、そんな気持ちにさせてくれる。(評:辻育子)

特別賞

白鹿町文化交流センター
あゆむ径 8.2×6.5 cm
径 8.0×6.5 cmきん ま ら でん
蒔醬 螺鈿そば猪口「てふてふ」

石村有弓 / 岡山県

〈漆・麻・銀・銅・貝 / 乾漆・蒔醬・螺鈿〉

重なり混ざり合う空気感、ゆるやかな形の心地よさを感じてもらえるよう制作しました。

〔選 評〕 乾漆により作られた四角、三角の優しい造形が心地良い。内側は螺鈿の光と銀平目粉が輝き、丁寧な呂色仕上げとなっている。外側は蒔醬技法により青、紫、白色と銅粉の金属感が織りなす美しさは、心に響いてくる優作である。(評:三田村有純)

特別賞 平成記念美術館 ギャラリー

9.5×9.0×7.0 cm
10.0×9.0×7.0 cm



私 69 才と妻 66 才の夫婦そば猪口 塩井隆晴 1949 年 / 神奈川県
(ガラス / 吹きガラス)

妻の注文で、私ののは青模様に頭文字 TS を、妻のは黄色に MS を。

〔選 評〕濃紺をトーンとしたガラスの輝きが美しく緑色と青色のアクセントが効果的で、デザインも斬新である。器の周りに描かれたご夫婦の名前の頭文字は、重量感のある器を持ちやすくしており、そば猪口としての機能を高めている。二つ一組のバランスも美しい。(評：宮下克彦)

特別賞 瀬戸市新世紀工芸館

8.5×8.5×6.5 cm



光散乱 鈴木由美子 1976 年 / 神奈川県 (陶 / イッチン・金彩)

昨年の春、長野を訪れた時のこと。春の日差しにキラキラと輝く雪解け水は、口にするのと柔らかく冷たい！その感動を作品で表現してみました。

〔選 評〕ほぼ球体の曲面を描くとても美しい形が白色と相俟って心地よい。口縁をたおやかな曲線を描くように切り、イッチン技法で極小の波を作る。控え目に施した金彩も効果的である。長野を訪れた際、春の日差しにキラキラと輝く雪解け水を口にした時の感動を表現したということである。ろくろのリズム感、スッキリとしたシャープな高台の作り出しなど、確かな技術に裏付けられている。(評：金子賢治)

審査員賞

9.2×9.2×7.3 cm



とち ち
栃杣そば猪口「月影」 泉谷郁美 1990 年 / 石川県 (漆・栃 / 拭き漆)
静かな夜の月の光をイメージして作成しました。

〔選 評〕ろくろによる成形が巧みである。そば猪口の側面が美しく反りあがり、そば猪口と蓋をセットとした全体の形が実に美しい。また、すり漆で木目を繊細に表出させ、月光に浮かぶ墨絵のような淡い情景を感じさせる。(評：宮下克彦)

審査員賞

8.8×8.8×6.5 cm



Tropea Sunset 金 知瑞 1984 年 / 韓国 (漆・陶土・金箔・銀箔 / ろくろ・漆焼き付け)
心の中にあるトロピカの沈む太陽。その一瞬を作品にしました。

〔選 評〕陶胎漆器としてその形状、バランスが実に美しい。内側のろくろ目の上の透明な漆の塗り重ねは胎釉を彷彿させる。外側は緑の乾漆粉でまとめ、沈んでいく太陽を三つのシーンに分け、大きさの違う金銀色箔の円弧で表現しているところは秀逸である。(評：三田村有純)

審査員賞

8.0×8.0×7.0 cm



みなも 黒田明日美 1996年 / 東京都

(ガラス / キルンワーク・エッチング)

安曇野を訪れた時に見た清流をイメージして制作しました。

【選 評】 スマートな形のカップ型で、口縁が優雅に波打っている。緑の一部を残して曇りガラスとしている。技巧を抑え、装飾や模様なども極力抑えた表現が、形のシンプルさと響き合い、品格高い猪口に仕上がっている。窯の中に針金で板ガラスを吊るし、へたらせて形を作り、表面をエッチング（腐食）で曇らせる。「安曇野を訪れた時に見た清流のイメージ」を表現したということだが、まさにその清涼感溢れるそば猪口である。（金子賢治）

審査員賞

8.3×8.3×6.3 cm



溜塗そば猪口Ⅰ・Ⅱ 黒田昌吾 1963年 / 富山県

(漆・栃 / 溜塗り)

用の美を第一に考え、シンプルな形、おちついた溜塗りで仕上げました。
幾何学的な文様で現代性、遊び心を少し加えました。

【選 評】 力強い遊び心満載の幾何学模様に対して、持ってみると手の中にすっぽりはいる優しい持ちやすさ、食べやすさを追求した大きさと形、まさに用の美を感じた。使い続けることによって違う景色がでてきて、また別な作品、いや作品は使うことによって完成するのか、という楽しみを感じさせてくれる。弊店での黒の折敷の上にこのそば猪口でお客様へお出ししたくなった。（評：辻育子）

審査員賞

9.2×9.2×6.8 cm



春めく サイツハ 1988年 / 石川県

(銅・銀・金箔 / 鍍金・象嵌)

安曇野のわさび田とわさび花、そして桜と残雪の北アルプスをモチーフに制作しました。

【選 評】 銅板を用い、鍍金技法で形成された作品。安曇野のわさび田と、彩る白い花々、さらに北アルプスの残雪の山並を、銀線の象嵌技法で精緻に構成し、金属特有のサビ出しで表面処理した一点である。一方、斜線彫りの構成と華やかな緑青によるサビ彩が美しい面を飾る一点。各々内側に金・銀の箔で加飾され対照的な造形が光る。（評：木下五郎）

集 花

安曇野の自然の中で咲き誇る花にホテルが舞い降りるさまを表現しました。

秋葉博美

1971年 / 東京都

8.0×8.0×6.8 cm

(磁 / ろくろ・彫り・蜎手)



空からの贈り物

安曇野に降る雨と雪をイメージして作成しました。

足立佳代

静岡県

9.5×9.5×7.0 cm

(陶 / ろくろ)





ばい か も 梅花藻

安曇野を訪れたとき、流れる小川で見た
梅花藻をイメージしました。

足立喜子
1965 年 / 岐阜県
8.5×8.5×6.3 cm
〈磁 / 練り込み〉



夢うつつ

夢とうつつの境を漂う心地良い夏の
まどろみをイメージして作りました。

荒井真澄
1964 年 / 神奈川県
7.9×7.9×5.7 cm
〈磁 / イッチン〉



種

暗くて静かな土の中にある種の
イメージです。

市野麻由子
1993 年 / 兵庫県
7.5×7.5×7.0 cm
〈陶 / ブロンズ釉〉



凜

凜とした器でおいしいおそばをどうぞ

井筒敏彦
1963 年 / 京都府
8.3×8.3×7.2 cm
〈陶 / 天目釉〉



しのぎ 鍋そば猪口

シンプルな形と黒の組み合わせで
スッキリした猪口を作成しました。

大谷哲郎
1951 年 / 愛知県
9.5×9.5×7.5 cm
〈陶 / 鎊〉



しずく

そば色のライン入りの手になじむ形の
しずく形です。

大塚くるみ
1954 年 / 愛知県
8.0×10.6×7.1 cm
〈陶 / 板づくり〉



COSMO

心の奥から湧き上がるイメージを描いて
います。無限の宇宙からのメッセージ。

岡田育子
1963 年 / 愛知県
8.0×8.0×6.5 cm
〈陶 / 掻き落とし〉



湧 水

安曇野の美しい空とわさび田のすがすが
しい湧水をイメージしてすっきりとブルーを
使い骨董金継ぎ風に仕上げました。

各務有香
1968 年 / 東京都
径 8.0×6.5 cm
〈磁 / ポーセレン〉



SOU

あつ。そうそう。そば湯割り。

香川弘一

1963 年 / 兵庫県

8.0×8.0×8.5 cm

〈陶 / たたら・彩泥〉



一 服

安らぐ形を組み合わせました。

河原卓也

1990 年 / 東京都

10.0×10.0×9.0 cm / 10.0×10.0×7.0 cm

〈陶 / 象嵌〉



夕 影

日が沈み夜がやがてやってくる。
その中で少しの明かりが残っているような
感じをイメージして作りました。

木口泰広

1985 年 / 長野県

径 8.0×7.0 cm

〈陶 / ろくろ〉



は・な

“かわいいそば猪口”を作りたいくて
作成しました。

岸 さよ子

1955 年 / 大阪府

9.0×9.0×7.5 cm

〈陶 / 掻き落とし〉



無 題

石臼をイメージして作成しました。

北川 治

1964 年 / 富山県

径 7.0×6.0 cm / 径 7.0×6.6 cm

〈陶 / ろくろ〉



Shell

その瞬間の土のやわらかさ、
それが作られた勢い、それらの跡。

倉知栞里

1990 年 / 愛知県

8.0×8.0×7.0 cm

〈陶 / 型〉



象嵌幾何文蕎麦猪口「旋廻」^{せんかい}

左右に旋廻する幾何学文様を配って、
独特の雰囲気を持たせました。

小林聖生

1980 年 / 長野県

6.4×8.9×8.9 cm / 6.3×8.8×8.8 cm

〈陶 / 象嵌〉



ちょう む ちゅう 釣夢宙

見て、触れて楽しめるように浮彫りを
施しました。手にとったときのゴツゴツ感を
楽しんでほしいと思います。

米谷彰能

1955 年 / 石川県

9.5×9.5×6.1 cm

〈磁 / ろくろ・手捻り〉



山笑う 紫の刻

早春の山をイメージしてみました。

坂口禮子

1941 年 / 長野県

8.0×8.0×6.2 cm

〈磁 / ろくろ・一部練り込み〉



星光・朝霧

移ろいゆく美しい情景を表現しました。

佐藤正徳

1973 年 / 愛知県

8.3×8.3×6.8 cm

〈陶 / ろくろ〉



ゆうりこう

釉裏紅象嵌そば猪口「水切り」

湧水のイメージ
静かにリズムカルに

篠田明子

1962 年 / 長野県

8.0×9.0×8.0 cm

〈磁 / ろくろ・象嵌・釉裏紅〉



さいか

彩何猪口

色彩とリズムを即興的に楽しい模様を
構成しました。

篠田弘明

長野県

径 8.0×7.6 cm

〈磁 / ろくろ〉



ミルキウエイへ

安曇野の夜空をイメージして作りました。

高木彩子

1950 年 / 東京都

径 9.0×6.5 cm

〈陶 / 象嵌〉



れつもんさいでい

裂紋彩泥そば猪口

陶器特有の表現を楽しめる器を
作成しました。

高津潤一郎

1973 年 / 神奈川県

8.0×8.0×6.5 cm

〈陶 / ろくろ〉



光の花

安曇野に降り注ぐ澄んだ日の光を
イメージして制作しました。

滝本汐里

1993 年 / 愛知県

9.0×9.0×5.5 cm

〈磁 / 練込み〉



すずかぜそら

涼風空

そば畑の上空、青空と涼風を
イメージして作成しました。

田中悦子

1979 年 / 静岡県

8.5×8.5×7.0 cm

〈磁 / ろくろ〉



ロボコップ

待ちに待った夏休み。
おじいちゃんの家の広い縁側で見た夢。
冒険が待っている!!

田原形子

1960 年 / 東京都

8.0×8.0×7.5 cm

〈陶 / 下絵・化粧・上絵〉



シカク A・B

原土の持つ独特な雰囲気を活かすよう
作成しました。

波多野祐希

1993 年 / 愛知県

7.4×7.4×7.3 cm

〈陶 / 型〉



秋の十草

土を紙で巻いた様により作り、
秋の風を十草で表現しました。

ひが直美

1968 年 / 愛知県

8.6×8.4×7.5 cm

〈陶 / たたら〉



そばの音

勢いのある線でそばを食べる音を
表現しました。

飛田厚子

1974 年 / 愛知県

8.5×8.5×7.0 cm

〈磁 / 鋳込み〉



蕎麦揺らぎ紋青粒猪口

そばというシンプルな素材を意識して、
デザインもタテのライン（そば）とつゆの
イメージとし、落ちついた姿に仕上げました。

本多孝弘

1968 年 / 石川県

7.0×8.0×8.0 cm

〈磁 / 青粒〉



木洩れ日

樹皮の隙間から光が透けるよう、
木漏れ日をイメージして作りました。

前沢陽彦

1980 年 / 富山県

8.0×8.0×6.5 cm

〈磁 / ろくろ〉



よう か すい い 陽花水庭

室山池の水面に広がる睡蓮を
イメージして制作しました。
蓋は薬入れとして使用できます。

町山あゆみ

1971 年 / 茨城県

10.5×10.5×9.0 cm

〈磁 / 鋳込み〉



みず ゆい 水 結

山々より流れ来る安曇野の清らかな
水のイメージで制作しました。

三宅日加里

1990 年 / 岐阜県

8.2×8.0×5.4 cm

〈磁 / ろくろ〉



太郎と花子のそば器

窓に写る、赤い星・青い星を紋様として構成し器にしました。

宮島正志

1953年 / 東京都

9.6×9.6×8.6 cm

〈陶 / 釉彩〉



緑彩真麗線文そば猪口

緑一色と線文のみの構成で、どんなシーンでも映える器を試みました。

宮本雅夫

1971年 / 石川県

8.0×8.0×6.6 cm

〈磁 / 色絵〉



そば猪口

古代の歴史が多く残る長野県。そばも古くから食されていたもの、太古を感じながらフランス・ラスコー洞窟壁画の猪口で手打ちそばを食べるイメージで作りました。

森瀬和廣

1949年 / 岐阜県

7.0×8.0×7.0 cm

〈磁 / 焼貫呉須・絵付け〉



染付そば猪口

まだ夏になっていない紫露草の生き生きとした生命力を染付で表現しました。

屋我優人

1987年 / 愛知県

8.3×8.3×6.2 cm

〈磁 / 染付〉



脈

水脈、人脈、葉脈など、そばに関わるものの脈の流れをイメージして作成しました。

山浦早織

1985年 / 石川県

8.3×8.3×7.8 cm

〈磁 / ろくろ・上絵〉



夏色

夏の風に乗って、さわやかな花の香りがふう〜と素の自分を戻してくれる瞬間。そんな幸せを分け与えられたら嬉しいです。

葉明慧

1979年 / 岐阜県

10.5×8.5×9.5 cm

〈陶 / 手塗り・絵付け〉



線象嵌六角そば猪口

たたいて、象嵌しました。

若林靖之

1976年 / 山形県

8.0×9.0×7.5 cm

〈陶 / 象嵌〉



櫛造蕎麦猪口一対

櫛材を挽物技法で成形し、外側は拭き漆、内側は朱塗立で仕上げました。

浅賀貴宏

1983年 / 福井県

10.0×10.0×5.8 cm

〈漆・櫛 / 挽き物・拭き漆・朱塗り立〉



宙と田園

安曇野の過去と未来をイメージして造りました。

伊藤敦欣

1947年 / 長野県

7.5×7.5×7.0 cm

〈漆・麻紐・貝・金箔 / 蠟色仕上げ〉



古色

日々うつろう表情の気配に着目し、古色を帯びた猪口を制作しました。

金保洋

1991年 / 石川県

径 9.0×7.0 cm

〈漆・樺 / 変り塗〉



茜空

空高く茜色に染まった夕暮れをイメージして作成しました。

川田 勉

1978年 / 香川県

8.0×8.0×6.5 cm

〈漆・綿紐・麻布 / 乾漆〉



星雲

安曇野の夜を表現しました。

北山圭一

1956年 / 香川県

8.0×8.0×8.0 cm

〈漆・楠・金箔 / 砂子塗〉



カレーイ猪口「春秋」

安曇野の春、新緑のさわやかな風。秋、紅葉のそよ風をイメージした、軽い猪口を制作してみました。

小坂 進

1955年 / 長野県

径 9.0×7.2 cm / 径 8.6×7.2 cm

〈漆・檜・シナ・麻布・錫 / 巻き上げ〉



雨上がりに

縄文土器（イメージ）とそばの花、それから雨上がりのもや水（水蒸気）をイメージして作成しました。

齋藤弘茂

1976年 / 石川県

8.5×8.5×7.2 cm

〈漆・樺・砥の粉・金・銀・貝・ウスラ卵殻 / 蒔絵〉



みき 幹

「深い森の中の苔むした一本の樹」をイメージして絵を描くように漆を塗りました。

佐々木響子

1992年 / 岐阜県

8.0×8.0×7.0 cm

〈漆・樺・錫粉 / 木芯・蒔絵〉



あかつき 暁月に帰る君

なごりの余韻に酔う、振り返ると新月が暁の空に張り付いている。

竹内克己

1949年 / 福島県

6.5×6.5×6.5 cm

〈漆・パルプ・顔料・錫粉 / パルプ乾漆〉



みぎわ 汀に宙

水辺の光彩を星空の映るイメージで作成しました。

竹森公男

1949年 / 長野県

8.0×8.0×6.5 cm

〈漆・銀・錫・アルミ / 木芯・螺鈿・蒔絵〉



涼

水中に煌めく日差しと水の流れを思い描きながら制作しました。

谷口元美

1960年 / 京都府

4.7×4.7×6.8 cm

〈漆・麻布・鮫貝・銀粉・箔・乾漆・螺鈿・蒔絵〉



紐胎八角そば猪口

素材・テクスチャの工夫により、意外な手取り感を演出しました。

千葉 功

1975年 / 群馬県

8.0×8.0×6.5 cm

〈漆・麻紐・錫粉・夜光貝 / 乾漆〉



滝

流れ落ちる水が、渓谷美の中で神秘的な姿を見せてくれています。

蔡 雨錫

1992年 / 台湾

8.5×8.5×8.0 cm

〈漆・棉布・白蝶貝・青貝・銀消粉・金箔 / 脱乾漆・螺鈿〉



そば猪口「瀬戸のさざなみ」

香川の伝統的工芸品の後藤塗りの文様で瀬戸内海のおだやかな海をイメージして作ってみました。

中田 充

1952年 / 香川県

7.5×7.0×6.0 cm

〈漆・ほおの木 / 後藤塗り〉



満つ〜 mitsu 〜

そばの実の形をモチーフとし、種から漲る生命力を表現しました。

野殿英恵

1982年 / 香川県

径 9.5×9.0 cm / 径 8.0×6.8 cm

〈漆・麻布・地の粉・砥の粉 / 乾漆〉



ぼてり

ふつくと、しつとりと手に馴染むうづわを制作しました。

橋本珠美

1995年 / 石川県

9.0×9.0×7.0 cm

〈漆・栃・ウレタン / 旋盤〉



野生の香

螺鈿でそばの葉茎を、黒い紋紗は手ざわりに違いをつけてそばの育つ土をあらわしています。強い存在感と生命の発する香りをテーマとしました。

林 真央

1993年 / 東京都

9.0×9.0×6.2 cm

〈漆・麻布・檜・金粉 / 螺鈿・伏彩色・紋紗塗〉



黒百合

富山の立山に咲くクロユリをイメージして作成しました。

平澤紗英

1994年 / 富山県

8.2×8.2×6.2 cm

〈漆・麻布・錫粉・乾漆〉



蒔地そば猪口

赤と黒の蒔地仕上げの上にアルミ粉を埋め、安曇野の清流をイメージしました。

藤本和也

1987年 / 石川県

径 8.0×5.8 cm

〈漆・栃・アルミ粉 / 蒔地〉



ノスタルジア

そばの葉をデザイン化し、一面にある様を表現しました。

藤原 愛

1992年 / 石川県

7.6×7.6×6.4 cm

〈漆・麻布・金粉・銀粉・炭粉 / 乾漆・蒔絵・石目地〉



「つなぐ」蒔絵そば猪口

私ごとですが、先日大掃除をしていた時に偶然に亡き祖父の名前が入った行李をみつけました。戦死された祖父とは、一度も会っていませんが、その時に今自分が有るのは連綿とつながる先祖のお陰であると強く感じました。人と人との繋がりの大切さを七宝つなぎ文で表し、題名をつなぐとしました。

松山武司

1962年 / 石川県

8.1×8.1×6.5 cm

〈漆・榎 / 蒔絵〉



艶木底絵蕎麦猪口「Urumi」

口つけ、そば湯までおいしく頂く器。
零れたそばの実には芽を出し、花咲く。

真船由佳

1986 / 石川県

径 8.8×5.5 cm

〈漆・榎・銀粉 / 螺鈿・ろくろ・拭き漆〉



木目美織猪口

江戸時代より人々は長寿や金運の願いを込め、そばを食してきました。
その願いを形にしました。

水井愛裕

1982年 / 石川県

径 7.2×5.7 cm / 径 5.1×4.1 cm

〈漆・榎・オパール・機・絹糸・ウレタン / 千筋・象嵌〉



漆溜塗そば猪口「蜜蜂唐草文」

西洋では蜜蜂は幸運をもたらすそうです！
型は基本の丸型端反です。
以上の様に作成しました。

水尻幸太

1980年 / 石川県

8.0×8.0×7.0 cm

〈漆・榎 / 蒔絵・沈金〉



漆変塗そば猪口「三友唐草文」

昔ながらの変塗に唐草文様をめてたい
松竹梅に書いてみました。

水尻里見

1951年 / 石川県

9.0×9.0×6.5 cm

〈漆・榎 / 蒔絵・漆絵〉



漆八角そば猪口「春秋」

型は八角のさし物木地、文様は日本の四季を表現した代表的な春秋文。日本人の心の文様と思います！

水尻清甫

1954 年 / 石川県

8.0×8.0×7.0 cm

〈漆・杓 / 沈金・本堅地〉



漆蕎麦猪口研ぎ出し布錆目

漆の下地仕事をメインにしてみました。下地仕事ならではの感触と質感が味わえます。

森 安史

1972 年 / 香川県

径 8.0×6.4 cm

〈漆・麻布・櫛 / 研ぎ出し布錆目〉



櫛・栃造夫婦蕎麦猪口

自身が既婚者ではない為、一番イメージしやすい夫婦（両親）をイメージして作りました。黒（父）。赤（母）。

山下大輔

1980 年 / 石川県

径 7.0×8.0 cm / 径 7.0×9.0 cm

〈神代櫛・栃 / 拭き漆〉



信州の道

信州の高原をイメージして作成しました。

横瀬孝子

1944 年 / 神奈川県

径 9.0×6.5 cm

〈漆・桂 / 漆塗〉



水 底

見込みに川底に光る石を表現しました。

横山美穂

1984 年 / 石川県

7.5×7.5×6.3 cm

〈漆・麻布・金箔 / 乾漆〉



べん 六瓣堆漆猪口杯

手にフィットする楕円のフォーム、塗り重ねた漆から研ぎ出された様々に変化する模様と色彩。

廖 家慶

1975 年 / 台湾

8.0×9.0×9.0 cm

〈漆・麻布・地粉・金梨子地粉 / 乾漆・堆漆変り塗・金梨子地〉



春

造形は乾漆技法で制作しました。螺鈿と卵殻を利用し、春の草木がすくすく伸びる姿を現しています。

林 彦光

1993 年 / 台湾

7.0×9.5×11.0 cm / 6.5×10.0×11.0 cm

〈漆・卵殻・金箔 / 乾漆・螺鈿〉



そばだ わび きび 敲つ佐・寂

作品名敲つは伏せて有明山をイメージ。シンプル直線を強調して制作しました。

小口富雄

1948 年 / 長野県

7.5×8.7×13.6 cm / 7.1×7.0×13.5 cm

〈檜葉・スプルース / 板剥ぎ・自然クリアー塗装〉



春 秋

見ただけでそばが食いたくなる器を目指しました。

加藤隆哉

1964 年 / 神奈川県

径 8.0×7.5 cm

〈竹・柿渋・ウレタン / 削り・塗・磨き〉



木の声

無垢の木の自然な質感、素材感を生かすことを大切にしました。

鈴木岳志

1975 年 / 長野県

7.7×7.7×6.5 cm

〈機 / ウッドターニング〉



木製そば猪口

杉の木目の美しさを「うずくり」で強調し、そば猪口に表してみました。

原 博直

1947 年 / 東京都

9.3×8.6×8.6 cm / 7.8×7.8×8.8 cm

〈杉・ウォールナット / 糸鋸加工・接着・うずくり〉



水 紋

水面に広がる波をイメージし、寄木で表現しました。

松本宇紘

1991 年 / 京都府

径 6.8×7.3 cm / 径 7.0×7.5 cm

〈神代櫨・柃 / 挽き物〉



Plant cell

顕微鏡で見えるような植物の構造に焦点をあてて制作しました。

阿部貴史

1985 年 / 神奈川県

8.5×8.5×8.5 cm

〈ガラス / 吹きガラス〉



石 層

不揃いな所を楽しんでもらえる作品を目指し制作しました。

石橋和法

1988 年 / 埼玉県

径 8.0×7.0 cm

〈ガラス / 吹きガラス〉



みなも

水面に揺れる波の様子をイメージしました。

井之下 翔

1991 年 / 長野県

8.0×8.0×8.5 cm

〈ガラス / 吹きガラス〉



野 分

夕闇に吹く力強い風の姿を表現しました。

榎本なつえ

1968 年 / 神奈川県

8.0×8.0×7.0 cm

〈ガラス / 吹きガラス〉



春 暁

吹いたガラスを酸液で曇りガラスにし、口元には金を巻いています。

江良 徹

1985 年 / 千葉県

8.2×8.2×7.3 cm
(ガラス / 吹きガラス)



花 雲

たくさんの花を浮かべた雲がただよっているのをイメージして作成しました。

大塚 薫子

1989 年 / 静岡県

径 8.2×7.0 cm
(ガラス / 吹きガラス・エナメル絵付け・金彩)



何気ない一日を

1日の終わってから始まり、夜景と朝焼けを表現し、制作しました。

沖中 彩花

1997 年 / 兵庫県

8.5×8.5×8.2 cm
(ガラス / キャスティング)



黄昏時

昼から夜へ。
だんだん暗くなって星が見えだす空をイメージして制作しました。

加瀬 あすか

1987 年 / 千葉県

径 7.8×6.7 cm
(ガラス / 吹きガラス)



霜 柱

つめたい土の中で起こっている出来事を表現しました。

上橋 由佳

1980 年 / 長野県

7.7×7.7×8.1 cm
(ガラス / 吹きガラス)



てまり

手鞠の糸の模様や、やわらかい雰囲気ガラスで表現しました。

佐々木 ちえ子

1990 年 / 秋田県

7.0×7.0×6.3 cm
(ガラス / 吹きガラス・サンドブラスト)



ring ring ring ...

水紋の様な泡の様な、涼やかに広がるイメージで作成しました。

佐藤 裕実

1993 年 / 秋田県

7.5×7.5×6.5 cm
(ガラス / ホットワーク・サンドブラスト)



ほどける

上昇するにつれ、ほどけてゆくような湯気を思い浮かべました。

島田 まるみ

1991 年 / 千葉県

8.5×9.0×8.2 cm
(ガラス / 吹きガラス)



湧 泉

命を育くむ清らかな水をイメージして制作しました。

白藤晴久

1965 年 / 滋賀県

7.0×7.0×6.7 cm

〈ガラス / 吹きガラス・サンドブラスト〉



阿 吽

おしゃべり女房と無口な亭主。
あと3年で金婚式。

菅谷美子

1946 年 / 東京都

径 9.0×7.0 cm

〈ガラス / 色被せ・カットガラス〉



おとなくふる 音無降

食事の際の音は日本の食文化の一つだ
と思います。それと対比して音の無い空間を
器で作りだしたいと思い作成しました。

高坂真次

1985 年 / 茨城県

9.0×9.0×7.5 cm

〈ガラス / ヒンブロウ〉



紫彩万華鏡

万華鏡にインスピレーションを受けて
制作しました。

中尾雅一

1977 年 / 福島県

7.0×7.0×6.5 cm

〈ガラス / 吹きガラス〉



nature

そば畑の緑と安曇野の水に
白い花が咲いています。

難波立子

1966 年 / 岩手県

径 7.5×9.1 cm / 径 7.6×8.6 cm

〈ガラス / 吹きガラス〉



雷 雲

夏の雲の代名詞。
入道雲をイメージしました。

深町史晃

1981 年 / 埼玉県

径 9.5×8.5 cm

〈ガラス / 吹きガラス〉



ばい ほう 梅 芳

梅の花が美しく咲きほころぶ様子を
表現しました。

藤田創平

1992 年 / 富山県

7.7×7.7×7.2 cm

〈ガラス / 吹きガラス〉



米粒猪口

一粒一粒に触れたくなる様な
面白いディテールにこだわりました。

藤村恵里

1990 年 / 新潟県

9.0×9.0×6.5 cm

〈ガラス / パート・ド・ヴェール〉



折々

折り紙をモチーフに折り構造の規則性のある美しさとガラスの柔らかさを合わせ持ったそば猪口を制作しました。

藤原彩葉

1990年 / 石川県

径 8.0×10.0 cm

(ガラス / 吹きガラス)



残照のひつじ雲

夕日に照らされたひつじ雲と夜のほほえみをイメージしました。

嶺井海音

1991年 / 長野県

8.4×8.4×8.8 cm

(ガラス / 吹きガラス・アイスクラック)



Kaleidoscope

のぞき込んだ時の万華鏡のような景色をイメージしました。

三原なぎ

1985年 / 埼玉県

径 7.0×5.4 cm

(ガラス・銀 / 吹きガラス)



Energy of Forest

森の持つ瑞々しさ命の力強さを色ガラスの特性をいかし制作しました。

宮本崇輝

1985年 / 富山県

8.0×8.0×7.3 cm

(ガラス / 吹きガラス・サンドブラスト)



線

混ざって、紡いだ糸をイメージして制作しました。

三好愛音

1992年 / 長野県

7.6×7.6×7.0 cm / 7.9×7.9×7.0 cm

(ガラス / 吹きガラス)



ふたりそば猪口

ふたりで美味しいそばを食べるため、安曇野のワサビとマリーゴールドの花をイメージしつつ、ヴェネツィア由来のレースガラスの手法を用いて制作しました。

森川オサム

1949年 / 東京都

7.5×7.5×7.5 cm

(ガラス / 吹きガラス)



○と□のコンポジション

上から見れば○、横から見れば□の円柱型に、様々な○と□で構成しました。

山本弥生

1964年 / 東京都

7.0×7.0×7.0 cm

(ガラス / サンドブラスト)



ゆらめく

水面がゆらゆらゆらめいている様子を表現しました。

湯浅明子

1988年 / 埼玉県

7.3×7.3×7.3 cm

(ガラス / 吹きガラス)



夜と朝のすきまに

耀変の技法を用いて、
時の流れを表現しました。

吉岡 星

1982 年 / 秋田県

8.0×8.0×7.0 cm
〈ガラス / 吹きガラス〉



富士見ノ巻物

富士を見ながら無事と不死の願いを
巻物にしました。

岡澤治季

1982 年 / 長野県

8.5×4.0×8.5 cm
〈純銀・K18・漆・瑪瑙 / 彫金・漆焼き付け〉



清 流

安曇野の清流と水面に映る月。
夜明けを待つイトンボを表現しました。

坂口美夏

1974 年 / 長野県

7.9×7.9×4.5 cm
〈純銀・SILVER925 / 金工〉



落としてもこわれない - 猪口 -

金属「猪口」なので、熱伝導がよく、
冷凍庫でも短時間で冷えたそば湯を提供
できる。(小は内面に漆加工、大はテフロン加工)

定塚康宏

1951 年 / 富山県

径 7.2×7.0 cm / 径 7.5×3.8 cm
〈アルミニウム・漆・テフロン / 鋳物〉



稜

そばの花が華やかに咲いている様子を
イメージして制作しました。

仲村 葵

1988 年 / 石川県

8.0×8.5×7.8 cm
〈洋白・真鍮・銅・アルミ粉・ブロンズ粉 / 透かし彫り・銀引き〉



red & yellow

冷水にさらされシャンとしたそばに似合う
形状をイメージしました。

松本光治

1950 年 / 長野県

7.2×7.2×6.5 cm
〈銅板・真鍮板 / 接ぎ合わせ・鏡面仕上げ〉



竹 口

竹を模したステンレススティールで
安曇野の清涼感を表現。

松本憲宜

1959 年 / 東京都

8.3×8.3×7.1 cm / 8.3×8.3×7.3 cm
〈ステンレススティール / 溶接〉



流 水

安曇野に流れる水をイメージして
作成しました。

田村啓悟

1997 年 / 東京都

13.0×13.0×9.0 cm
〈七宝・銀 / 鍍金〉

